

おかえり、僕の恋人

白髪になりたい系男子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何となく書いてみた短編小説。

実は私、海上自衛隊に入隊することになっています。

平和を護りたいという気持ちと共に、大和の艦名を受け継ぐ護衛艦にいつか乗れるならば……と淡い恋心を彼女に抱いていたり。

今回の小説はそんなお話です。

おかえり、僕の恋人

目次

1

おかえり、僕の恋人

「……君の名前を知ってから、もう何年経つのかな」

一人の男性が高い塔の上に立っている。

岸には多くの鉄の城が浮かび、桜が咲き誇っていた。

庇の付いた白い軍帽、白のダブルスーツ。

胸には多くの徽章を付けている。

肩には一等海佐、つまりは大佐の階級を表す章がその存在を目立つものにしていた。

「もしかしたら、ある意味恋なのかもしれないね……。僕は、君に恋をしていた。あの時、君を知ってから」

波風が彼のスーツを揺らす。

それと共に、海辺の公園から流れてきたのか、桜の花びらが彼の周りを舞い踊る。

まるで、彼を待っていたかのように。

まるで、彼がこの場所に立つのを待っていたかのように。

「……もう、君にとっては一世紀前のことだね。君が、この世に生を受けたことは……」

小皺が少し目立つ唇を小さく動かしながら、静かに、まるで恋人に愛を囁くかのように呟く。

どこかしら、歓喜に打ち震えるように声が上がっているようだ。

「二世紀経って、この国に戻ってきて……感想はどうか？君が……そしてあの人たちが護りたかった国があるかな？」

何処か寂しそうに、目を細めて言葉を紡ぐ。

あの戦争……彼は経験していないが、かつて国難を撃ち破る為に世界と戦った大戦争に想いを馳せる。

今ではあの戦争ではこの国は悪だ、と罵られている。

確かに、結果としては悪だったのかも知れない。

現にあの時の政府の、多くの人間は愚かだった。

しかし、国難を前に彼等は戦うしかなかったのだ。

この国を護るために、大切な人を、郷土を護るために……そして、未

来の子供達を護るために。

そして彼等は陸に、海に、空に散って逝った。

作戦能力が低度だったが故の過ち、大局を見なかった故の惨たらしい犠牲……。

この国——日本は今、彼等が守りたかった国になっているのだろうか。

心豊かに、自然豊かに……笑顔溢れる礼節の国になっているのだろうか。

彼にはわからない……しかし、彼は今、この国を護るが為にそこにいた。

「君に出会ったのは——そう。小学生の時だったな。図書室で読んでんだ。君についての物語を」

かつて、世界最強と謳われた鉄の城があった。

かつて、不沈と呼ばれた巨大な海の女王がいた。

しかし彼女は、命懸けの突撃によりその身を崩し……坊ヶ岬に眠っている。

1945年4月7日……ちょうど、桜が咲き乱れる季節だった。

「僕はとてもカッコいいと思った。美しいと思った。君が例え……人を殺す兵器だとしても、僕は君を美しいと断言するよ」

ふふっ、と肩を震わして微笑しながらハッキリと宣言した。

その目は、宝物を手に入れたかのように、恋人と結ばれたかのように輝いていて——

「……<やまと>。おかえり。そしておはよう。そして初めまして……僕が君の、新しい司令官だ」

「君はまた、この国の海に蘇った。また、この国を護れるんだ。この国の、平和を」

「……ずっと、憧れていた。君のことを。君が再び生まれることを信じて、僕は海上自衛官になったんだ」

「君と共に……この大好きな日本を、大好きな人達を護りたい」

「……さあ、行くか。これが君の……始まりの朝日だ」

彼が手を挙げると、それと同時に汽笛がなった。

それと共に軽快なマーチが響き渡る。

「イージス護衛艦やまと。進路そのままあ！」

先ほどとは打って変わり、怒声のような声を張り上げて艦橋内の部下達に指令する。

しかしその顔はとても明るくて……。

「進路そのまま！ヨースロー！」

日本が誇る最高の軍艦、大和。

その生まれ変わり、やまと。

彼女の止まっていた歯車は再び回り出す。

その巨軀で波を乗り越え、この国を護るために。

2000年。4月7日。

護衛艦やまと、就役。

『再びこの海に戻って参りました。やまと型護衛艦一番艦やまと！推して参ります！』